

## 子どもは全存在を通して自分の 気持ちを表に現わしている

患者から学ぶ

小林 隆 児

(大正大学人間学部臨床心理学科)

20歳の時に始めた自閉症児のための療育ボランティア活動がその後の自分の人生を決めたと今さらながら痛感させられる。

今でも再三にわたって思い起こされるエピソードのひとつに、九重(大分県)で毎年夏開催していた療育キャンプでのあるひとこまがある。筆者が駆け出しの精神科医であった頃である。キャンプでの集団遊戯の時だった。子どもひとりひとりにスタッフ(主に学生)がつき、常に一緒に行動していた。「おしくらまんじゅう」をしている最中であつた。数十人の仲間が遊びに熱中し、もみ合いになった。その時、ある子ども(当時小学校高学年の男児)を女性スタッフが担当していた。その女性は社会人になってまもない人で、エキゾチックで成熟した女性の魅力をたたえていた。その子が「おしくらまんじゅう」でみんなともみ合いになっていた時、どさくさにまぎれて彼はその女性のお尻や身体をさかんに触っているのを筆者はそばで目撃してしまった。その時の彼の表情はやけにうれしそうでやけていた。今でも彼のその時の顔が目に浮かぶほど印象的であつた。その時、筆者はいやらしさよりも、彼の中に潜んでいた(男性であれば誰でも持っているであろう)異性への憧れや欲求と恥じらいがと

てもストレートに表現されていて、いたく感動したのを覚えている。

\*\*\*\*\*

筆者が前の勤務地で創設したMother-Infant Unit(MIU)で初期にかかわった事例をまとめたことがある(小林, 2000)。セッションが始まって間もない頃のことだった。抱かれるのを嫌がる男の子に対して、母親にしっかりと抱っこをし続けてもらった。初めの頃は抱かれるのをひどく嫌がり、激しく暴れて逃れようとしていた。母親も筆者も初めての体験だったので必死だった。その最中になんとその子が突然「こわい!もうやめてよ!苦しいよ!」と腹の底から絞り出すような断末魔の叫び声を上げたのである。普段はまったく聞かれないような切実な声で、自分の気持ちをストレートに表現したことに、その時の筆者のころはひどく揺さぶられ、今でも記憶に焼き付いている。

\*\*\*\*\*

自閉症の話しことばの特徴のひとつに「鶴の一声」(若林, 1973)と呼ばれるものがある。それまで一言もしゃべらなかつた(しゃべれないと思われていた)子どもが切羽詰まった状況で突然驚くほどにしっかりとしたことばを話し出す。周囲の者はいたく感動し、ことばが話せるようになったと喜ん

だ途端に、以後再びまったくにも話さない。「鶴の一声」はそんな自閉症の人々の話しことばの一端を示している。

先に述べたエピソードとこの「鶴の一声」はどこかでつながっていると常々感じている。それは何かといえば、状況次第では自閉症の子どもたちも自分の気持ちをストレートに言動で表に現わすのだということである。

\*\*\*\*\*

MIUでの臨床活動を14年間継続してきたが、そこで出会った事例は90例近くに及んだ。実際の関係支援を行ったのは60例ほどであつた。

MIUでは初回時に関係評価のための枠組みとして、愛着パターン評価を目的として世界中で実施されている新奇場面法(SSP)を用いてきた。母子の分離と再会の場面を人工的に作り、そこで認められる子どもの愛着行動によって愛着パターンを評価するのだが、評価そのものよりも、そこで母子双方が示す関係のありようの機微に筆者は毎回驚かされるとともに、新発見の興奮を味わってきた。開発者のAinsworthも恐らくそのような体験をしたことがSSPの開発につながったのではないかと思う。

\*\*\*\*\*

ある2歳4カ月の高度難聴の男児が、母親からの積極的なかわりにはあからさまに回避的態度をとっていたにもかかわらず、母親が退室してひとりぼっちになってしばらくすると、手に持っていた水鉄砲の銃口を回りに向けて、警戒的に身構え、恐る恐るゆっくりと歩を進めていた。まるで刑事ものの映画でも見ているようで、彼の警戒心の強さは尋常なものではないことが彼の全身の動きを通してひしひしと感じ取られた。

\*\*\*\*\*

1歳になったばかりの男児は、母親に抱かれるとすぐむずかり降りようとする。母親の働きかけには半身の受身的な構えを見せながら応じ、回避的な態度が目についていた。しかし、いざ母親が退室してストレンジャー（ST）と二人きりになると、最初はSTに向かって社交的な笑顔を浮かべながら手まで差し出し、なにやら自分から交流を持とうとでもするかのようであった。しかし、いざSTがそれに応えて近づき、至近距離になると、急に表情は強張り、ついにそれまでの緊張の糸が切れたようにして泣き始めた。初めて会った人に対して気遣う態度に、日頃母親に向けているこの子の心模様を想像すると、心痛むものがあった。

切羽詰った時に示す盲動もさることながら、よくよく見ていくと、子どもたちは自分という存在すべてを用いて自分の気持ちを表に現わしていることに今さらながら気づかされる。

\*\*\*\*\*

最近、筆者は囁託医で15年ほ

ど関与したある自閉症の施設でもに議論し考えてきた元職員と共著で「自閉症とこころの臨床」（小林・原田，2008）という本を上梓した。この中で共著者原田氏はまったくあるいはほとんどことばでコミュニケーションを持つことができない人々（おまけに癡まじい行動障害を示していた）との間で、数年から十数年かけて、こころの交流を持つに至った経緯が臨場感あふれる筆致で述べられている。まるで彼らの気持ちが手に取るように、である。筆者には到底およびもつかないようなことがなぜ彼女には可能であったのか。原田氏は「目の前にいる相手に対して『治療』というような意識を持ったこともなく、目の前にいる相手と自分（たち）が、どうしたら一緒に（できれば心地よく）過ごすことができるかを考えてきました」とさりげと言つてのける。そのような素朴な気持ちが彼らのこころを開かせるのであろうか。

\*\*\*\*\*

わが国では「子どものこころの診療医」を育成しようと厚生労働省が音頭をとって動き始めている。その発端のひとつとなったのは発達障害とされる子どもの激増であった。発達障害なる診断は実に安易に多用されているが、そこで子どものこころのありようがまったくといっていいほど浮かび上がってこないのはなぜか。脳障害を裏付けると考えられている障害や症状は見ても、彼らのこころの動きにはいたく鈍感な人の姿ばかりが目につくようになった。

\*\*\*\*\*

今春、縁あって新たな職場を得

た。そこで将来臨床心理士になる学生の教育に従事することになった。購読やゼミで学生にSSPの場面を見せながら、子どもたちがいかに繊細なこころの動きをしているか、繰り返し語るように心にかけている。難しいことは一切考えなくていいから、素朴に感じるままに報告するように、と再三にわたって伝えている。1学期間試みてきたが、彼らの多くが子どものこころの動きを的確に捉えていることを確認できて喜んでいる。

\*\*\*\*\*

学生時代に筆者が体験したこと、それは学問以前に子どもたちのこころに触れ合うことができたことであった。そのことが今思い返してみると決定的に重要なものだったと思う。今の学生にも同じような体験をしてもらいたい。発達障害とみなされている子どもたちもこころを持ち、全存在を通して自分を表に現わしていることを知ってもらいたい。学問以前の素朴な気持ちで、きちんと彼らと向き合うことがなにより大切であることを。

## 文 献

- 小林隆児（2000）自閉症の關係障害臨床—母と子のあいだを治療する—。ミネルヴァ書房。
- 小林隆児・原田理歩（2008）自閉症とこころの臨床—行動の「障害」から行動による「表現」へ—。岩崎学術出版社。
- 若林慎一郎（1973）。書字によるコミュニケーションが可能となった幼児自閉症の1例。精神神経学雑誌，75；339-357。